

まちの史跡めぐり……(99)

町文化財専門委員 石瀧 豊美

江戸時代へようこそ(10)

= 村の一年(続き) =

二回、絵葉書の紹介をさしました。再び、『村役人心得』を続けます。

【五月】

『村役人心得』で五月の項に挙げられているのは次の五つです。

妊婦の調査

地頭納め

春普請の決算

田植

用水の分配

この内、「地頭納め」についてはすでに触れました。「妊婦の調査」は二月が「夏季懐婦臨月帳」だったのに対し、今回は「秋季」出産予定者の分です。春普請の決算

春(一〜三月)の普請はすでに終わっています。春普請を完了し、太工の支払はいくらだったというふうな、決算書類の提出です。その工事は「御免用春諸普請」と呼ばれています。農閑期に行く、ため池などの工事です。

田植、用水の分配
旧暦の五月はほぼ現在の六月梅雨に入り、田植えの季節でもあります。田植え(田方根付け)が済んだことを庄屋は大庄屋へ

報告しなければいけません。早魁の年には田方分水(用水の分配)が問題になります。川やため池の水は、上流から順次水を田へ引き込んでいきますが、上流から下流までの村々の間に契約が成り立っていました。何月何日の何時から何時までどの村が水を取る。それが終わると、次の村が……という具合です。農民達が自分の都合で判断すると(文字通り「我田引水」ですね)、何ヶ村もが対立する大騒動になります。庄屋は村と村との約束事を守ると同時に、村内の農民の間に不公平が生じないように、用水の分配を管理していました。

【六月】

博多祇園会

六月は博多祇園山笠の月。現在七月に行っているのは、旧暦から新暦に切り替えた時に、月遅れの行事になったためです。本来は六月十五日が追い山といふことになりました。

毎度のことですが、博多の祇園祭に見物に出る時は、禁止された品を用いないよう、改めて庄屋は村人に徹底しておかねばなりません。違反したらどうな

久我記念美術館

7月企画展 9日(土)~24日(日)
(月曜休館・祝日の場合は翌日休館・入場無料)

濱本重和展

7月の久我記念美術館は、9日から24日まで濱本重和さんの展覧会を開催します。

濱本さんは長崎県諫早市在住で、半立体と呼ばれるジャンルの作品を制作されています。半立体作品は、壁面に掛け、見る側と作品とが相対するという点では絵画的であり、凹凸があったり、かさばったりする点では彫刻的な性格を持っています。

濱本さんのメッセージを紹介します。



作品は、その人の日常の中から、その人の五感を通して色、形となって立ち現れたものであり、言い換えれば、表現されたものは、その人そのものです。

私はここ数年、平面に飽き足らずして、いったん面を切断し、さらに再構築した半立体形状の作品を制作しています。形を切断することで、それがより自由になり、さらにそれを再構築することによって、作品自体に空間性を持たせることができたように思います。

濱本 重和



濱本さんの作品

略歴

- 1948年 長崎県愛野町生まれ
- 1982・84・86年 北九州絵画ビエンナーレ展
- 1984年 現代日本絵画展
- 1983年~ モダンアート協会展
- 1988年~92年 日韓現代絵画展
- 1995年~ 「平面の自在」展
- 1997年 「思考する空間」展

アンデルセン生誕200年におくる 『おはなしの夕べ』

……富原美智子さんをおむかえして……

とき 7月23日(土) 18:30~(無料)
ところ 久我記念美術館

須恵おはなし会

6月の企画展

北田 明子 展

6月11日(土)~26日(日)(月曜休館・入場無料)

るか。庄屋は村人への管理責任を問われることになるのです。根っこ・水当て

田植えをした後の管理がまた大変です。草を抜いたり、水の量を削減したり……。絶えず田の見回りをしなければなりません。

蝗害の防止

蝗(トビ)が発生しそつたと見えたら、手遅れにならないよう、庄屋が指示して早めに鯨油を注ぎます。虫を殺すために編み出された方法です。鯨油の配分が間に合わない場合は、すぐに藩に届け出るよう、細心の注意を呼びかけています。

これは享保十七年(一七三二)から十八年にかけての享保の大飢饉の経験があったからです。ウンカが大発生し、稲の茎を食い荒らしていききました。虫が水に浮いて流れていく時、川の水の色が変化したと言われています。秋になって食べるものがなく、福岡藩では三〇万人の人口の内、一〇万人が餓死したと言われています。その人たを供養したのが飢人地蔵で、中洲や石堂川べりなどに今も祭られています。西日本各地での餓死者は九六万人以上と、幕府の記録

には書かれています。郡夫

郡夫は村単位で行う公共の土木事業よりも大規模なもので、郡全体から人夫を動員することを言います。今年の冬から来年の春にかけて、農閑期に工事を行う場合の郡夫の見積もりを報告するよう求めています。

多田羅村(現福岡市東区多々良ほか)の六ツ田の例を上げてみましょう。

この時は、多々良川南岸の干潟を開発して田地が生み出されました。指導したのは王丸彦四郎です。宝永元年(一七〇四)のことで、長さ七千九八六間の土手を築いて、三五町九反四畝二〇歩の新田が作られました。

この工事では、土手が崩れないよう、工事を一気に進める必要があったらしく、王丸彦四郎は藩の許可を得て、表粕屋・裏粕屋・那珂・席田の四郡から七万人を動員し、五日間で工事を無事終了に導いたといふこと(「糟屋郡志」)。